
姫君は女王様!?

めもかもめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫君は女王様！？

【Nコード】

N9413P

【作者名】

めもかもめ

【あらすじ】

私が望んだのは、思うがままに生きること。それは誰にも強制されず、抑圧されず、命令されず、強奪されず、侵害されずに私だけの未来を掴むため。もう二度と自分を抑えるような生き方はしたくないのだから。

* かつこいいいことってますが、コメディ色が強いかも？

ぶろろーぐ

かつて世界には争いが溢れていた。覇権を求め奪い合い、いつもどこかで争いが起こっていた時代が舞台。

最下層の身分で生きる人々は搾取され続けた。上中層の身分の者達のために、とにかく生きて生産しなければならない。例え、その果てに命を失うことになっても。

彼らは暴動を何度も起こしたが、そのたびに鎮圧された。そして必ず首謀者が処刑される形で終わったのである。

中層（戸籍がある）の者は、戦にかり出された。生きて帰る者は半分、もしくはそれ以下。もし、長男以外戦に出なければ処罰と世間からの非難が待っている。

上層の者達は下の者達から奪うだけ奪って戦を止めようとしなない。彼らが望むのは飽くなき欲求が満たされることのみ。

そして土はやせ細り、緑は枯れていった。

こんな悲惨な状態を世界が憂いたのか、ひとりの男が遣わされた。彼は類い希なる能力と知能と武力によって戦を無くすため奔走した。

これは平和のために傷つき、涙を流しながらも人々の希望であり続けた一人の男の壮大な物語である。

…が、今作ではあまり関係無い。彼は脇役であり、その物語もか
する程度。

そして主人公はこの世界に転生した女性である。彼女の物語は伝
説にはならず、数多の歴史の中に埋もれていく。

だが彼女を知る者は皆こう言った。

『 様ほど光が似合わない御方は他にいない。あの御方の炎は闇
の中で輝くのだから。』

そして我らは、その炎に群がる蛾のごとく、求めずにはいられな
いのだ』

ーと。

お姫様は欲望に忠実!?

はてさて、この時代に生まれついて20年。あゝ、かつての戦国時代と思ってくれて充分充分。つつーか、私も全部把握してるわけじゃないし。

でも、いろいろと違うところがある。

昔にチートキャラっていなかったよね! (^ o ^ ;) アレ?

風の噂でよく聞くよ。曰く、荒れ果てた土地を開墾して、さらに土を改良したとか。曰く、足軽から国主の娘の婿養子になって、次期後継ぎだとか。(ハーレム作りそう) 曰く、100人以上いる賊をたった一人で倒したとか。テラ無双www

とまあ、こんな感じでチートキャラについては話題は、毎日尽きることなく耳に入ってくる。

逆に私の方は日々のんびんだらり……といきたいところだけど、こつちもこつちで厄介事があったりするんだなあ。それは何かという、と、まあ、うん、なんというか、その、現時点で命の危険が。

「……………」

「そなたは何処の国の忍だ? って聞いても答えるわけないな」o

(^ - ^) o王道キタコレ

お互いの首筋に刃を突き付けながら、私は問う。台詞の後ろに
いてる物は無視してOK。内心の腐った思考だから

就寝してから数時間。なんかいやな予感がして、布団の中で短刀
を隠し持っていたら、あら不思議。ドンピシャで上から忍びが降っ
てきましたよ。

とはいえ、このままじゃまずいしなあ。この後はどうするか？

- 1・助けを呼ぶ 声出す前におさらば
- 2・誰か来るまで現状維持 ここにいるってことは近くの護
衛は殺されてるよねorz あと体力限界
- 3・あきらめる はい、絶対ダメ！！命は大事に
- 4・自分で何とかする 一番まし…かも？

4しかないよねえ。でも抜け出そうとしたら、反撃くらって即
お・陀・仏 だし。相変わらず忍びの青い眼を見つめたまま私は思
案する。

…ん？「青い目」？しかも切れ長の。ははあ（ニヤリ

瞬間私は首を横にずらしながら、短刀を持っていた右手の力を抜
いた。するとどうだろう。忍びのクナイがちょうど顔があったこ
ろに突き刺さる。

ここからが本番だ。教わったにわか体術でどこまでいけるか。ひ
とつでもタイミングがずれれば、反撃を食らってまた天に召されて
しまう。私はクナイを握っている方の肩の関節に、思いっきり掌底
を叩き込んだ。

「!?!?があつつ!?!」

「……ふふ」

(うめき声であっても美しいということとは!?)

そのままの勢いで忍びを仰向けにさせ、馬乗りになる。両腕の上に私の膝をのつけて、動きを封じた。そして私は彼の顔に巻いてある布をずらして、

――接吻をした。しかも濃厚な。

おゝ、驚いてる驚いてる。そりゃこんな状況でこんな事されるとは思わないだろうなあ。だけど私はやる! ただしイケメンに限る、みたいな! (〃^ ^〃)

そう忍びはイケメンだった。し・か・もハーフのね。役得vvv

「んむう、……っふあ」

「……ん、あむ、……はっ」

「はあ、……っ、何しやがる!?! 気でも触れたかつ!?!」

まあ、とりあえず今回生き残るためには、この忍びを動揺させて殺意を殺がないことには始まらない。つまり作戦は成功したわけだ。つか、忍びが色仕掛けで動揺って。いくらなんでもそういった修練は積んでいるでしょうに。でも、ここで逃がしてなんかあげないけどね。私は私の欲求に従う！！笑

忍びが起き上がろうとする前に、もう一度とどめの接吻を。そのまま唇を滑らして耳を食む。肩がはね上がり顔が真っ赤になっているようだ、まだ終わることはない。短刀も首筋に突き付けたまま私は唇が触れないギリギリの距離で忍びの顔に近付いて、見つめ囁く。

「ふふ、初々しくていいわね。妾のモノになりなさいな」

上体を起こして、人差し指で忍びの唇をなぞる。そして眼を細めながら、さらに言葉を重ねた。

「そうすれば、

――至高の快楽を教えてあげる」

私を呆然と見上げている忍びの喉がゴクリとなった気がした。
しかし堕ちるかと思った瞬間、眼の輝きが増し、私の人差し指に
噛みついた。犬歯で強く噛みつかれたため、指先から血の雫が零れ
おちる。

「いつつう!? やってくれたわね」

「断る!! 貴様はここで死ぬのだからな!」

痛みで力を緩めたため、押し倒されてしまった。つまり、最初の体
勢に戻ったわけだ。

忍びは無事な左手にクナイを握って、私目がけて降り下ろす。

「……それはどうでしょうね?」

な、何!? と声を上げるよりも前に、大人数で来ているであろう
足音が廊下から響いてきた。異変に気付いた家来たちが、私の元へ
駆け付けているのである。あれだけ騒いでいれば気付くのも当然。
もしも気付いてなかったらクビにしてやるところだ。

とはいえ間一髪。当初の殺意を殺ぐという目的とは、だいぶかけ
離れてしまったけど、時間稼ぎにはなったみたい。あと少しでも遅
れてたら確実に殺されていたでしょうし。

『うわっ、死んでる!』

『馬鹿者!! 姫様の安否を気にしろ! 急ぐんだ!』

『『『『了解!』』』』

「このままじゃ確実に捕まるわね。それでもまだ狙う？」

「…チツ。次に会ったら必ず殺してやる」

障子を突き破る前にそう言い残して去っていった。向こう側では、待て！等の怒鳴り声が飛び交う。

私は腰を上げて、あの忍を追いかけようとする家来に指示を出した。

「追いなさい。ただし深追いは許さない」

「しかし、それでは出どころがっ」

「護衛と見回りの者が音もなく殺されているのよ。相当の腕を持っているわ」

いきり立つ家来を諫める。一人一人の眼を見つめながら説得すれば、不満が少しおさまった。しかし、先ほどの私の台詞は、家来たちの腕を信用していないとも取れてしまう。

な・の・で

「それに、そなた達まで失くしたくないの…」

まあこんな感じに使い古されたセリフを言ってみた。

するとあら不思議。みんなジーンと感動しちゃってる。私にとつては古いセリフだけど、時代が時代だからねえ。

「我らのような下々にまで、そのような思いやり……。感服致しました。命尽きるまで、

生島国国主、今清水藍鹿様に変わらない忠誠を誓いまする！！」

先頭の男を皮切りに、次々と膝をついて頭を下げる男達。

さてと、家臣達によってようやく私の正体にまで辿り着いた。んじゃ、自己紹介を始めるわね。

この世界における私の名前と地位は、さっき言われた通り。付け足すなら、「前世」があつたくらい。しかも、ご丁寧に今生と同じ名前だったの。死因はおいおいとね。

私は多種多様なすごい能力を持っている訳じゃない。だから駒が欲しい。優秀でも無能でもどちらでもなくとも。使えるならば何でも構わない。

いずれチートキャラはいろんな国を統一する事になるでしょう。あちらにその気無くとも、高すぎる能力は大小関係なく争いを招く。もうすでに、娘の元許嫁とその派閥によって一波乱が起きることは、確定している。これは密偵による確かな情報だ。

あちらが勝つための戦をするのなら、私は負けないため、そして死なないための戦をするだけ。

でも、基本欲望に忠実だからo(^ ^)o
さっきみたいにww

姫君は冷酷！？（前書き）

主人公最初しか出てないです。ごめんなさい…。それと新キャラ2人登場！！

姫君は冷酷！？

あの暗殺事件から四日たった。いくら忍とはいえ、一人では私の部屋まで辿り着けないはず。ではなぜ、そんなことができたのか？

話は簡単。誰か手引きしたと言うことだ。もちろん、その下手人は捕まえ、処遇も決まっている。女中に成りすました女は、牢屋の中であれこれ考えを巡らせていることだろう。今の彼女に許されているのはそれだけなのだから。

「ねえ、椎名^{しみな}。彼女の様子はどんな感じかしら？」

「隙と機会があれば、自害しようとしていますね。出来ないように布を噛ませてあるので、心配はいりませんが。」

「なら安心ね。そのまま眠らせないように、監視し続けてちょうだい。」

椎名と呼ばれる男は頭を下げたまま藍鹿に答えた。

顔は見えないが、歳はおよそ20代後半。黒く長い髪をひとまとめにして背中に流している。白と黒の二色で統一されている袴は地味に思われるが、逆に男の禁欲的な色気をも少し出している。

顔を上げ、彼は口を開いた。

「いつものように尋問を始めればよろしいですか？」

「…そう、ね。方法はなんでも構わないわ。けど、お家騒動の時か

ら潜り込んでいたみたいなのよ。だから…、ね」

冷えた眼で藍鹿は椎名を見据える。まるで、言わずとも分かるだろうと眼で語っているかのように。

そして、彼はその意を汲み取り、是と返した。

空が赤く染まった頃、地下牢に明かりが灯されていた。冷たい空気が流れ込んで、いつ消えるか分からないほどの小さな蝋燭の火。

その火の下にいるのは3人の男女。女は手足を縛られており、口に布を嚙まされていた。舌を嚙んで自害させないためである。もう二人は牢の外で何やら話しあっている。

「姫様は情報を聞き出したあと、殺せとのことだ。方法はなんでも構わない。…ただ、しくじるな」

「あいよ。というか珍しいね！いつもはどんな人間であれ、抱え込んで駒にしちゃうのに」

「詮索は無用。では頼んだ」

「じゃあねん。あつ、藍鹿ちゃんに愛してるて伝えておいて！」

椎名は振り返って一言、

「……死ね」

とだけ言った。

ひどっ！と彼に向かって叫ぶが、もう背を向けて出口へと足早に去って行ったようだ。

残ったふざけた口調の男は、ぶつくさと言いながら牢の中へ入り、器用にまた鍵を閉めた。

眠っていない女はもうろつとする意識を起こして、近づいてくる男を警戒する。なおかつ、隙を探していた。

「残念だけど逃げられないよ。ましてや自害もね。ここは僕の領域だし。とりあえず、洗いざらい吐いてもらおうか」

「ううーっ!」

やれるようならやってみなさい！と言うような眼で男を睨みつける女。その強固な意志は痛みなんかで折れそうにない。

なら別の拷問をするだけ。

「イイなあ、その瞳。知ってる？過ぎた快樂って拷問になるんだよ。

痛みよりもね」

「……………っつ！？」

「あつ、こら。暴れたって無駄でしょ。まあそういうことだから、

壊れてしまえ」

そして男は女を追い詰めてゆく。自我が壊れるまで。

こうして夜は更けていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9413p/>

姫君は女王様!?

2011年1月9日01時55分発行